

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第613号 平成25年9月19日

シマフクロウの会（1）

先日、札幌市内で「北海道シマフクロウの会」の設立総会が開催され、私も、一会員としてこの設立総会に出席しました。

現時点での会員数は約260名との事ですが、当日は70名弱の参加の下、「北海道シマフクロウの会」は正式にスタートする事になりました。

本会の代表は北洋銀行会長の横内隆三氏、副代表は北海道新聞社長の村田正敏氏、及びアークス社長の横山清氏という、本道の経済界・マスコミ界でリーダー的存在の方々です。

また、理事の方々もエフエム北海道社長の宇佐美暢子氏、阿寒グランドホテル社長の大西雅之氏、北海道21世紀総研社長の檜森聖一氏、北海道環境財団理事長の小林三樹氏等各界を代表されるの方々ばかりですが、それは同時に、シマフクロウの保護に関する環境が如何に厳しいかを良く物語っていると思います。

「北海道シマフクロウの会」の目的は、「生物多様性の保護及びシマフクロウの保護活動等に従事する団体や個人」への支援を通して絶滅危惧種であるシマフクロウの保護活動等を推進しようとするものです。

つまり、会員自らが森に入ってシマフクロウの保護活動に当たるというのではなく、そうした活動を行っている団体や個人を支援しようというものです。その理由は、大勢の人が森に入り、結果として森を荒らす事はシマフクロウにとって一番の迷惑になるからだそうです。自然保護といいながら結果として自然を破壊している

という様な事は決してあってはなりませんので、慎重な対応が求められるのは当然の事です。

左図は、環境省釧路環境事務所が作成している「シマフクロウパンフレット」の表紙に描かれているシマフクロウですが、何となく目がかわいい、親しみを感じる表情をしています。

私は、本物のシマフクロウを見た事はなく、写真の姿しか知りませんが、獲物を狙っている時の眼光の鋭さは、野生に生きるものの凄みを感じさせますし、枝に静かにとまっている姿は、孤高の哲学者の様でもあり、また、古武士の様でもあります。



シマフクロウは、かつては北海道内全域に生息していましたが、開発により生息地である森林が破壊された事、また植林が行われてもその殆どは針葉樹である事、更には水質汚染や交通事故等々、様々な人間の営みによってシマフクロウの生息域が狭まり、今では北海道内の一部にしか生息していません。

設立総会の後、シマフクロウの保護と増殖活動に取り組んでいる山本純郎氏の講演がありました。山本氏のお話では、1980年には約1000羽が確認されたけれども、1980年には70羽程度と激減しています。その後、保護活動等により次第に増え始め、2010年では140羽プラス α まで回復したとしています。しかし、その半数近くは知床半島という限られた地域に生息しており、日本版レッドデータブックでは絶滅危惧種Aに指定されているという事です。山本氏としては当面、シマフクロウを今の倍の300羽に増やしたいと述べておられますが、同時に、300羽という数字は自然界では限りなくゼロに等しいという事ですので、シマフクロウめぐる環境の厳しさを改めて認識させられたところです。

(塾頭：吉田 洋一)